

JInclusive ournal of E ducation

Printed 2017.0830

Online ISSN: 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



“A house in the Zamami”

Megumi MIYACHIKA

August 2017
VOL. 3

ACTIVITY REPORT

特別支援学校 12 年間における系統性のある 生活単元学習の実践研究

ーキャリア発達支援を活かした授業づくりー

The Practical Study of the Systematical Life Unit Learning from 1st to 12th Grade of Special Support School: Class Planning by Utilizing Career Development Support

榎木 暢子¹⁾ (Nagako KASHIKI), 加藤 公史²⁾ (Koji KATO),
荏田 知則³⁾ (Tomonori KARITA), 吉松 靖文²⁾³⁾ (Yasufumi YOSHIMATSU),
伊勢本 大³⁾ (Dai ISEMOTO)

- 1) 愛媛大学大学院教育学研究科
(Graduate School of Education, EHIME UNIVERSITY)
- 2) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校
(Special Support School, Faculty of Education, EHIME UNIVERSITY)
- 3) 愛媛大学教育学部
(Faculty of Education, EHIME UNIVERSITY)

<Key-words>

生活単元学習, キャリア発達支援, 授業づくり
(life leaning unit, career development, class planning)

kashiki.nagako.mc@ehime-u.ac.jp (榎木 暢子)

Journal of Inclusive Education, 2017, 3:87-102. © 2017 Asian Society of Human Services

Received

2017 / 7 / 31

Revised

2017 / 8 / 22

Accepted

2017 / 8 / 22

Published

2017 / 8 / 30

ABSTRACT

知的障害のある児童生徒が生活を通して学ぶことの重要性から、領域・教科を合わせた指導として「生活単元学習」がある。本研究では、知的障害特別支援学校 12 年間の発達段階、生活年齢等に応じたキャリア発達を促進する生活単元学習を授業づくりの視点から検討した。小学部・中学部の「生活単元学習計画案」から、授業づくり及び授業改善の過程におけるキーワード分析を行い、高等部においては中心的な授業である作業学習と生活単元学習との関連を検討した。「働く生活」を実現させるために、小学部での自分の良さ＝価値に気づき、他者意識を育てること、中学部においては身近な地域の中で自分の価値を発揮できる力を育て、さらに他者の価値にも気づけるようにしていくこと、高等部においては自分が行っていることの価値を確認し、働く生活と関連付けるという、12 年間にわたる指導・支援の系統性が示唆された。

I. 問題と目的

1. 特別支援教育におけるキャリア教育

近年、特別支援学校におけるキャリア教育が推進されている。これまでの卒業後の進路を目標とした指導から、卒業後の生活の充実を目標とする中で、小学部から高等部までの12年間を通じた系統的なキャリア教育が課題となってきた。特に小学部・中学部におけるキャリア発達を促す指導の必要性は認識されてきているが、教育課程にどのように位置付けていくかは実践の積み上げと理論化が求められている。国立特別支援教育総合研究所は職業的（進路）発達に関わる諸能力として「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」を4つの能力領域を設定している（国立特別支援教育総合研究所, 2008）。若林（2014）はこれらの4つの能力に加えて、「生活の基本的技能」、「文字や数量の認識」、「体を動かす力」、「感性」も、キャリア発達と関連する力であり、系統的に学習を進める必要があるとしている。藤澤（2014）は知的障害特別支援学校の小学部・中学部の教員は①子どもの将来像をイメージして指導につなげる弱さがあること、②就労に向けた指導の必要性を感じているが、就労に結びつく具体的な学習内容が明確ではないことを明らかにしている。

2. 生活単元学習

学校教育法施行規則第百三十条には「特別支援学校の小学部、中学部又は高等部においては、特に必要がある場合は、第百二十六条から第百二十八条までに規定する各教科（次項において「各教科」という。）又は別表第三及び別表第五に定める各教科に属する科目の全部又は一部について、合わせて授業を行うことができる。」とされており、このような授業は「領域・教科を合わせた指導」と呼ばれている。知的障害のある児童生徒は生活を通して学ぶことの重要性から、領域・教科を合わせた指導として「生活単元学習」がある。上岡（2015）は生活単元学習を「生活に適応できるようにする学習」と捉え、「生きる力」、「生活の質」、「集団の質」の向上を目指す学習であると述べている。特に「生きる力」は主体的行動が重要なのではなく、主体的な行動を引き出す内面の働きが重要であり、思考、判断、気づき、見通しを伴う主体的行動を引き出す体験の積み重ねによって、育まれるとしている。また、生活単元学習が単なる体験で終わるのではなく、活動を通して「生活の質」を高め、生活意欲を高めるところまでを目標として活動を定める重要性を指摘している。このように、地域の中で豊かに生きる生活を実現するためには、生活単元学習が果たす役割は大きい。

3. T校における生活単元学習

T校では2008年度より「卒業後の働く生活を実現するために」をテーマとして、知的障害のある児童生徒のキャリア発達を支援する授業改善を図ってきた。T校の教育課程は「日常生活の指導」、「生活単元学習」、「作業学習」等の「領域・教科を合わせた指導」を中心に編成されている。図1にT校の教育課程とキャリア発達のキーワードの関連を示した。

「日常生活の指導」、「生活単元学習」は小学部から取り組んでおり、中学部、高等部と進むにつれ、発達段階に応じた指導を行っている。また作業学習は中学部、高等部で取り組んでいる。12年間のカリキュラムを通して、「生活の自信」を育み、「生活意欲」を引き出し、「働く意欲」につなげ、現場実習を経て「働く力」となり、「人生の質の向上」を目指している。

また、T校ではキャリア発達を促す授業づくりに焦点を当て、児童生徒のキャリア発達を

支援するための取組を進めている。授業づくりの柱としては「A 単元・学習内容設定の工夫」、「B 学習環境・支援の工夫」、「C 評価の工夫」という3点を設定している。表1に授業づくりの3つの柱に対応する改善課題を示した。

2008年度からの7年間で「知的障害のある児童生徒の発達段階・内容表（試案）」を作成し、生活単元学習の授業づくりを通して、各学部におけるキャリア発達の段階を明らかにしてきており、主体的に生きる力を育む道筋は見えたものの、小学部・中学部の義務教育段階での学びの系統性が捉えられていなかった。小学部・中学部における学習の中心は生活単元学習であることから、まずは生活単元学習の9年間の系統性のある指導を明らかにし、さらには、高等部での作業学習を中心とした教育課程における生活単元学習の位置づけを明確にすることで、12年間の系統性のある指導を明らかにしていく必要がある。

4. 目的

本研究では、T校の小学部・中学部の各学級（学年）及び高等部における、発達段階、生活年齢等に応じたキャリア発達を促進する生活単元学習の課題及び授業づくりを検討し、今後の展望を考察することを目的とする。

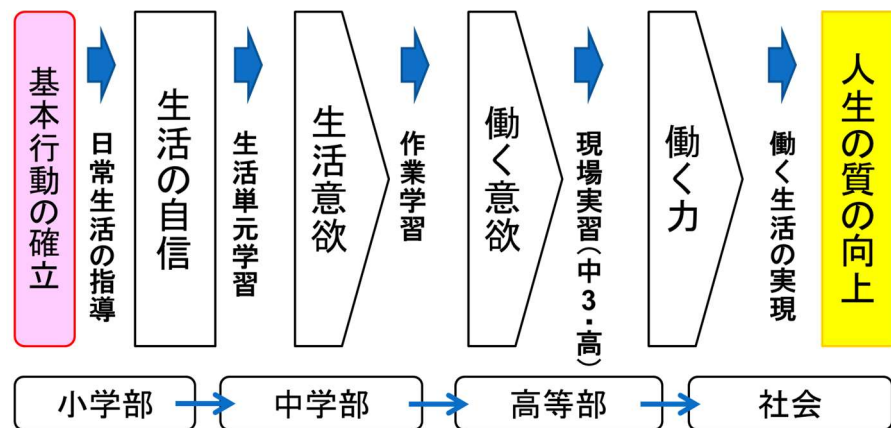


図1 T校の教育課程とキャリア発達のキーワード

表1 授業づくりの3つの柱に対応する改善課題

授業づくりの柱	改善課題
A 単元・学習内容設定の工夫	1 ふさわしい生活が単元化されている 2 活動の目的が共有しやすい学習内容である 3 一人一人の実態を踏まえた単元設定である 4 主体的に取り組み、自ら解決できる課題が設定できる
B 学習環境・支援の工夫	1 課題解決のための条件（何を、どのように）が、分かりやすく示されている 2 子どもが思考・判断する姿を発揮できる学習環境・支援である 3 子どもが“強さ”に焦点を当てた学習環境・支援である 4 一般的に正しい方法で課題を解決できる学習環境・支援である 5 上記の手立てが、子どもが主体的に課題を解決する上で最小の学習環境・支援である
C 評価の工夫	1 子どもが自己評価しながら取り組める課題設定や支援ができていない 2 正しい判断をしながら取り組まなければいけないことを、子どもが意識できる手立てである 3 子どもが課題を解決するために正しく自己評価できたことを、分かる方法で評価する

Ⅱ．方法

本研究ではアクションリサーチ（Action Research）の手法を用いる。これは当事者（本研究では特別支援学校教員）と研究者等の関係者が、計画、実施、評価を繰り返し行うことで問題解決を目指す研究方法である。以下では筆者らが行ってきたアクションリサーチによる生活単元学習のあり方を検討する方法を記す。

1. 小・中学部における生活単元学習計画案作成と授業研究、評価（20XX年度）

筆者らはT校に、小学部3学級、中学部3学級（学年）の計6クラスでキャリア発達の段階を踏まえた「生活単元学習計画案」（以下、「計画案」）作成を提案した。「計画案」は学校の教育目標、学部の教育目標、学部における授業設計の方針、学級（学年）の子どもとの願いと実態から、学級（学年）の授業設計の方針を明確にした上で、単元計画を作成、授業評価を行うことを依頼した。T校では小・中学部の教員16名が「計画案」に沿って授業を行い、改善課題をチェックし、単元終了後に授業評価が行われた。

＜小・中学部における生活単元学習計画案の作成＞

① 生活単元学習計画案作成（5月）

各学級・学年において「計画案」を作成、学校目標、学部目標、学部における授業設計の方針、学級（学年）の子どもとのねがい（1年後の姿）と実態、学級（学年）の授業設計の方針を記入。

② 生活単元学習の単元計画作成、授業実施（5月～2月）

生活単元学習の単元計画を作成、小月組（1・2年）と中1は年間で1回、小花組（3・4年）、小星組（5・6年）、中学部2、3年はそれぞれ2回、校内授業研究を実施。

③ 生活単元学習の課題チェックと授業評価（7月～2月）

「計画案」の改善課題チェック項目：単元の授業を展開する上での留意点として附属特別園学校における授業づくりの3つの柱における改善課題を活用。

④ 生活単元学習の成果を縦断的に評価（3月）

「計画案」に研究授業の成果を授業評価として記入。

2. 「計画案」の分析（20XX年度）

T校における各学級（学年）が記入した「計画案」の①（個別の）目標設定のキーワード、②学級（学年）の授業設計の方針、③単元の概要、④授業評価について、KJ法を用いてカテゴリー分類した。カテゴリー分類はアクションリサーチの観点から実践内容を熟知している筆者の内2名により確認した。カテゴリー名の一部はT校の「知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階・内容表（試案）平成27年度版」（愛媛大学教育学部附属特別支援学校, 2015）を参考にした。

3. 高等部における生活単元学習の検討（20XX+1年度）

筆者らはT校に作業学習と関連付けた生活単元学習の授業づくりを依頼し、T校と協働で高等部における生活単元学習のあり方を検討した。

＜高等部における生活単元学習の授業づくり＞

① 学び方別生活単元学習の計画・実施及び考察（5～11月）

学び方別生活単元学習班の編成、授業計画作成、授業研究・評価及び考察

② 作業班別生活単元学習の計画・実施及び考察（11～2月）

作業班別生活単元学習班の編成、授業計画作成、授業研究・評価及び考察

Ⅲ. 結果

1. 生活単元学習計画案（計画案）の作成と考察

① 個別の目標設定のキーワード

各学級（学年）個別の目標のキーワードは8項目のカテゴリーに分類された。表2のように分類した。表3に各学級（学年）の個別目標設定のキーワード数を示した。なお、その他は中2の1学年のみだったので、紙面の都合上、表には入っていない。

表2 個別の目標のキーワードのカテゴリー

カテゴリー	記述
基本行動	習慣形成
人間関係	集団参加、意志表現
やりがい	やりがい、生きがい、夢や希望
自分のこと	自己選択、自己理解、肯定的な自己評価
他者のこと	人との関わり、状況・相手に応じた言動、他者理解
働く	はたらくことの喜び、協力・協同、役割の理解と働くことの意義
情報活用	様々な情報への関心、社会資源の活用とマナー
その他	忍耐力

表3 学級（学年）の個別目標設定のキーワード数

	基本行動	人間関係	やりがい	自分のこと	他者とのこと	働く	情報活用
月組	3	12					
花組		6	5				1
星組	2	3	2	1	2	1	
中1	3		5	3	1	2	1
中2				5	6	3	1
中3			6	5	5	2	

② 学級（学年）の授業設計の方針

表4に各クラスの授業設計の方針のキーワードを示した。また、表5に各クラスの授業設計の方針のキーワード数を示した。月組では5項目すべてがあるが、花組では「働く」以外のキーワード数は1つになり、小学部5,6年である星組と中学部では「やりがい」「自分の事」「働く」の3項目に絞られていた。

表 4 学級（学年）の授業設計の方針におけるキーワードのカテゴリー

人間関係	集団参加	・友だちと一緒に仲良く遊ぶ ・場を共有して遊んだり ・みんなと一緒に楽しく活動してほしい
	意志表現	・自分から進んで
やりがい	やりがい	・いろいろな遊びや活動に取り組んでみようとする意欲 ・やりがいを感じながら活動する ・充実感や達成感を味わう ・人の役に立つ喜びを感じたり ・自分の役割を果たし貢献することの喜びや成就感を得る経験 など
	夢や希望	・中学生らしく行動したり、活動や作業に取り組んだりしていきたい ・自分でできることを増やし、周囲から認めてもらいたいという願い ・地域生活にも生かしていきたいという思いや態度 ・中学生らしい憧れの気持ち ・「できる自分」、「役立つ自分」になりたいという願い など
自分の事	自己理解	・好きなことや得意なことをいかした遊び ・自分の得意なことや良さを生かし ・役割を果たすことができる自分に気づき ・自分のよさや得意なことに気づき ・集団の一員としての肯定的な自己理解を深めてほしい など
	肯定的な自己評価	・自分の力でやり遂げたことを実感しながら ・人から感謝される喜びを味わい ・感謝されたりする活動 ・肯定的な自己評価を重ねてほしい
他者の事	人との関わり	・教師に関りを求めており ・友だちと一緒に活動することで他者とのかかわりや興味関心を広げ ・友だちとかかわりながら取り組むことの楽しさ
	他者理解	・友だちのすることをまねたりする
働く	はたらくことの喜び	・褒めてもらえることに喜びを感じている ・友達や何かのために役に立つこと ・身近な人々の役に立ち認められる経 ・人の役に立ち、人に喜んでもらえる経験を通して など
	協力・協同	・みんなと協力して取り組んでいこうという意欲的な姿 ・学級の友だちと協力して ・学級集団としての質を高めたい ・学級集団としての目標に向かい など
	役割の理解と働くことの意義	・学級や友だちのために活動してがんばろうという気持ち ・自分たちの役割を意識し始めており ・目的を意識し地域生活に生かそうとする ・自分の役割を果たす など

表 5 学級（学年）の授業設計の方針のカテゴリー別キーワード数

	人間関係	やりがい	自分の事	他者の事	働く	その他
月組	3	1	2	3	1	
花組	1	1	1	1	3	
星組		1	2		5	
中 1		3	3		4	
中 2		3	2		2	1
中 3		6	1		4	

③ 単元の概要のキーワード

単元の概要におけるキーワードは 5 つのカテゴリーと 16 のサブカテゴリーに分類された。表 6 に単元の概要におけるキーワードのカテゴリー分類、表 7 に単元の概要における主なサブカテゴリーとキーワード、表 8 に学級(学年)別の単元の概要における主なサブカテゴリー別のキーワード数を示した。

表 6 単元の概要におけるキーワードのカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー
習慣形成	・習慣形成
主体的な行動に関する意識	・意欲・主体性 ・自信 ・目的意識・見通し ・やりがい
自己理解と役割意識	・自己理解 ・肯定的な自己評価 ・役割の理解と働くことの意義
他者とのかかわり	・集団参加 ・人との関わり ・状況・相手に応じた言動 ・他者理解 ・協力・協同 ・他者からの評価
生活の広がり	・家庭生活への反映 ・地域での活動

表 7 単元の概要における主なサブカテゴリーとキーワード

サブカテゴリー	キーワード
意欲・主体性	・主体的に活動に取り組もうとする意欲 ・自分のもっている力を十分に発揮しながら ・子どもの新たな発想や興味関心を生かしながら ・もてる力を精一杯発揮する ・子どもたちの生活意欲を高める など
目的意識・見通し	・何をどうすればいいか考えながら作ろうとしたり ・生活全般への向き合い方の変容を図る(2) ・精一杯働かせた意識 ・目的が子どもたちにより意識できるよう
自己理解	・自分の良さを生かしながら ・よさや得意なことを生かして ・役立つ自分を感じれるよう ・自己効力感を感じることで自己理解を深め など
人との関わり	・友だちと一緒に作って楽しかった ・友だちと一緒に活動する楽しさ ・人とのかかわりの中で
他者からの評価	・お客さんに喜んでもらう ・認められる経験 ・人から喜ばれ ・園児さんに楽しんでもらったり、喜んでもらったりする
家庭生活への反映	・家庭や学校生活において ・家庭生活の中での手伝い等にも生かすことができる ・保護者の意識を変えるきっかけになり ・家庭での生活につながりという意味で価値ある活動になる
地域での活動	・地域での活動へ目をむけるきっかけになることを期待できる ・地域に貢献できた成功体験を通して ・現場実習という地域生活にも通用する生きる力になることを目指した ・地域に貢献できたことを実感できる など
協力・協同	・学級の友だちと共通の目的に向けて協力したり ・友だちと協力して活動する など
役割の理解と働くことの意義	・自分の役割の意味を意識しながら ・自分の役割を果たす など

表 8-1 学級（学年）別単元の概要における主なサブカテゴリー別のキーワード数①

	習慣形成	主体的な行動に関する意識				自己理解と役割意識		
		意欲・主体性	自信	目的意識・見通し	やりがい	自己理解	肯定的な自己評価	役割の理解と働くことの意義
月組	1		1	1			1	
花組		2			1			
星組		1	1					1
中 1				1		1		1
中 2				2		3		2
中 3		3		2	1	1		3

表 8-2 学級（学年）別単元の概要における主なサブカテゴリー別のキーワード数②

	集団参加	人との関わり	他者とのかかわり				生活の広がり	
			状況・相手に応じた言動	他者理解	協力・協同	他者からの評価	家庭生活への反映	地域での活動
月組		1						
花組		1			1	2	2	
星組		1		1			2	
中 1					1			1
中 2	1				1	1		2
中 3			2			1		3

④ 授業評価のキーワード

表 9 に授業評価のキーワード①子どもたちの姿、表 10 に授業評価のキーワード②授業改善を示した。授業評価についても月組と中 1 は 1 単元、そのほかは 2 単元である。

児童生徒のキャリア発達を促す授業づくりの評価（自由記述）では、小学部では「学級のみんなと協力して自分の役割を果たす経験ができる単元を小学部中学年の 2 学期辺りから計画していることは効果的」、「『してもらおう』活動よりも『してあげる』活動を設定する方が、児童の内面を育てる効果があるのではないかなど、まずは役に立つ自分を実感できる課題を設定することが挙げられた。中学部では「地域を舞台として展開してきた学習の積み重ねが子どもたちの存在価値を高める学習となった」など、学校や家庭での役割から、身近な地域の中での役割へと、生活範囲の広がりやキャリア発達の関連を考える必要が指摘された。

表 9 授業評価のキーワード①子どもたちの姿

	自信・意欲・主体性・	目的意識 見通し	やりがい	夢や希望・先輩への 憧れ	状況・相手に 応じた言動	協力 協同	役割の理解と 働くことの意義
月組	3		1				
花組					1	1	4
星組		1	1	2		2	3
中 1		2		2	1	1	1
中 2			2	1		2	1
中 3	1	1	1		1		2

表 10 授業評価のキーワード②授業改善

	活動設定	課題設定	環境づくり	支援の工夫	得意なことを活かす	内面を育てる
月組	1					
花組		1				
星組	1				1	1
中 1	1		1		1	
中 2	1	1		2		
中 3		1	1		1	2

2. T 校における生活単元学習の授業事例

T 校研究収録より抜粋、一部改変して掲載する。詳しくは文献 3)、4) を参照されたい。なお、筆者らは単元計画立案、教材作成、授業研究に関わった。ここでは、I - 3 に示した「授業づくりの 3 つの柱」に沿って、授業研究の成果を記す。

1) 小学部花組 (3・4 年)「はなぐみ ふゆのレストランをしよう」

① 単元について

本単元の活動は、小学部中学年の児童らしい「やってみたい」、「なってみよう」という憧れの心情を織り込みつつ、6名の児童が力を合わせてレストランを運営し、身近な相手（本単元の場合は中学部生徒）に喜んでもらう活動である。子どもにとって分かりやすく、イメージしやすい生活を単元化することで、身近な場で「自らの価値」を磨き、実感することのできる活動である。ここでは、主にレストラン厨房でのBの事例を取り上げて解説する。

② 授業展開と支援の手立て

<A 単元・学習内容設定の工夫の視点から>

本単元での学びを深めるためには、お客さんが心から「来てよかった」と思えるレストランにすることが大切である。精一杯力を発揮して役割を果たし、お客さんに喜んでもらえたという、確かな実感をもってほしいからである。そのためにも、提供する献立の質や、一人一人が受け持つ役割の価値を高めることが重要である。児童一人一人がもっている力を最大限に発揮するとともに、課題性のある学びが設定できるかどうかを検討し、子どもたちと話し合っ、献立（カレーライスとサラダ）を決定した。図2は、レストラン開店時の場の設定と役割分担である。ご飯の盛り付け・野菜等のトッピングを担当したB（3年生女子）は、自閉的傾向があり音楽や絵を通して自分なりの自由な表現をすることが好きな児童である。少しずつ相手の立場や気持ちを考えて行動しようとする意識が芽生えてきたBの単元目標と観点別の評価規準は、次のとおりである。

○ 注文どおりに、正しくトッピングをする※

- ・ オーダー票や友達の動きを確認しながら活動に取り組もうとする。《関・意・態》
- ・ 印を見て、場所や向きに気を付けながらトッピングしようとする《思・判・表》
- ・ 野菜の形を崩さないようトッピングする《技》
- ・ 正しく盛り付けをすることの大切さが分かる。《知・理》

＜B 学習環境・支援の工夫の視点から＞

「学習環境・支援の工夫」は、子どもが精一杯力を発揮して役割を果たすための手立てや仕掛けである。図2に示したように、活動の流れが分かりやすい動線にしたり、入り口に来客を知らせるベルを設置しその音を聞いてお客さんを迎える言葉を掛けられるようにしたりするなど、児童が自ら判断し行動できるよう工夫した。前項に示したBの目標を達成するための支援の手立ては、次のとおりである。

(ア) 課題意識や意欲を高める手立て

単元の導入で地域のレストランを訪れて目にした、厨房のコックさんと同じ衣装を身に着けることで、イメージ豊かなBの課題解決意欲が高まるようにした（写真1）。

(イ) 仕上がりへの見通しをもつための手立て

花の形に型抜きした野菜や、ハート型のハンバーグ等、かわいい仕上がりが目に見える手立てや、それらをバランスよくきれいに配置するための基準となる目印のある皿を使う（写真1）ことで、よい仕上がりへの見通しをもち、やりがいを強く実感できるようにした。

(ウ) 人との関係の中で役割を果たす手立て

Bは、ご飯の盛り付け・ボイル野菜等のトッピングの2つの役割を受け持っている。Dの活動の進度に合わせ、場所を移動しながらも、間違いのないよう注文票を確認したり目印に合わせた丁寧な盛り付けをしたりするなどの確かな取組を進めてほしいと考えた。ア・イに示した支援及び、動線の分かりやすい場の設定（図2）は、そうした姿を発揮するための手立てでもある。人との関係の中で判断しながら自分の役割を果たす動きのある活動を通して、状況に応じつつアクティブな思考を働かせて発揮する生きた力を育てることができるようにした。

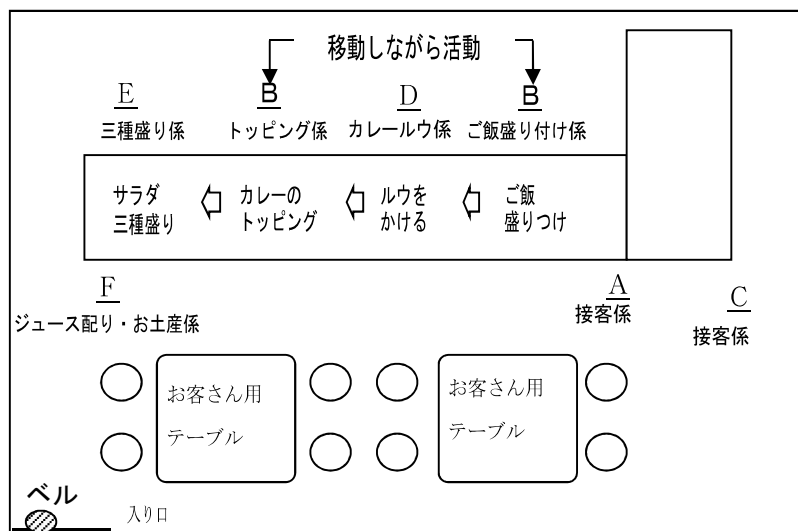


図2 レストラン開店時の場の設定と役割分担



写真1 カレー皿の縁模様を基準としたトッピング(上)と、盛り付けをするB(下)

＜C 評価の工夫の視点から＞

Bは、完成したカレーライスを見たり食べたりした中学部の生徒から「わあ、かわいいね」、「おいしいね」等の言葉を聞き、その表情を直接目にすることができた。お客さんに喜んでもらうという目的のために、オーダー票や盛り付けの基準である目印をよく見て確認し、場所や向きに気を付けて食材を丁寧にトッピングするという目当てを十分に意識して取り組んだ結果である。自分が役割を確かに果たしたことで、「お客さんが喜んでくれた」という評価を得ることにより、「正しく盛り付けをすることの大切さ」を、行動を通して実感し、理解することができたのである。

閉店後は、店長役の教師が、映像等を活用し目当てに沿った振り返りを行うことで、授業のねらいに沿ったより確かな学びとなるよう導くようにした。

② 実践の振り返り

野菜等を盛り付けたカレー皿を十分に見回し確認してから配膳係に手渡すBの姿は、目的に沿った自己評価ができていた姿であり、ねらいとする「内面」が働く姿であると確信している。「見通しをもって自分で判断し、最後までやり遂げることで自分の『価値』が磨かれたことを実感できる十分な学びがあれば、役割を意識したり人との関係の中でよりよく自分の力を発揮したりしようとする主体的な行動へと、その質が高まっていく」これが、本事例の基となる考え方である。

重要なことは、活動的な授業であるかということよりもむしろ、子どもが確かな「生きる力」につながる「内面の働かせ方」を発揮できているかどうかであり、そのための手立てや評価の在り方であるかどうかを検討した授業づくりを進めることである。本校研究の核である、「授業づくりを通してキャリア発達を支援する」という視点は、「主体的・対話的で深い学び」を実現する重要なヒントとなり得るものと考えている。

2) 中学部 2 年「M 幼稚園でゲームコーナーを開こう」

① 単元について

毎年 12 月に実施される学校祭では、中学部各学年がアイデアを生かしたゲームコーナーを計画・運営する。本単元ではその発展として、一人一人が自分の役割を果たし地域の幼稚園の園児たちにゲームを楽しんでもらう活動を通して、役立つ自分、貢献できる自分を実感してほしいと考えた。友だちと協力してゲームコーナーを運営し、園児に楽しんでもらうための活動は、どの生徒にとっても分かりやすく、明確に目的を意識できるものである。目当てをもって活動に取り組んだり課題を解決したりすることが結果として地域貢献につながる本活動は、本学級の生徒にとって「ふさわしい生活」を単元化したものであると考えた。準備したゲームは「射的ゲーム」と「魚釣りゲーム」である。

② 授業展開と支援の手立て

生徒が精一杯力を発揮してゲームコーナーの準備や運営に取り組めるよう、一人一人がもっているよさや能力を生かした役割を設定し、それぞれの場面に応じ適切な課題を設定した。ここでは、「授業づくりの 3 つの柱」に沿って、おもてなしリーダー係である F の活動を焦点に解説する。日常生活における F の実態は、次のとおりである。

- ルールや勝敗へのこだわりが強く、負けたときの感情をコントロールできにくい。
- 人前で話すことに自信がもてない。
- 様々な思いや願いをもっているが、言葉や態度で適切に表現できにくい。

<A「単元・学習内容設定の工夫」の視点から>

Fが役割を果たし貢献できた実感をもてる学習活動を編成し、解決できた手応えを感じる
ことのできる課題を設定したいと考えた。Fの役割は、射的ゲームで5つの的を全て射貫
いたパーフェクト賞の園児と、ボーナスゲームであるじゃんけん対決をすることである。授
業者が意図したFの課題は、「勝敗に関わりなく、やさしく丁寧な言葉や態度で対応するこ
と」である。幼稚園の園児を相手とした活動を中心に据えた単元を計画したことも、年長者
としてふさわしい態度を自然に引き出したいという意図からである。

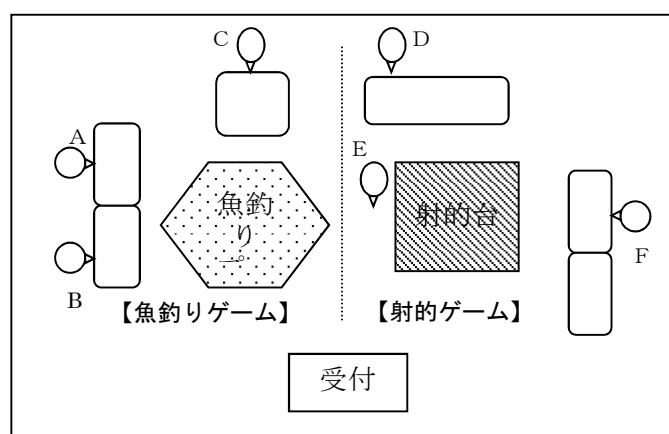


図3 ゲームコーナーの場の設定と役割分担

<B「学習環境・支援」の工夫の視点から>

ボーナスゲームは、カードを使ったじゃんけんとし、そのカードが相手から見えないボッ
クスを用意した。「後出し」や「相手からカードが見える」などルール不公平性が残ること
は、たとえ相手が園児であっても、Fにとって課題に集中できない条件となるからである。
園児が勝った際には、ハンドベルを鳴らして祝福し、景品を手渡す。

こうした環境的支援は、不要なつまづきのない状況で、子ども自身が精一杯考えたり判断
したりしながら活動を進め、主体的に課題を解決するための手立てである。

このような課題設定【A】と環境的支援【B】により、Fは、じゃんけんに負けたにもか
かわらず、自分に勝った園児に対し、ハンドベルを高々と掲げながら大きな声で「おめでとう
ございます」とお祝いの言葉を掛けることができた。

Fは、「子どもたちが自分に勝って喜んでくれてうれしかった」と話していた。これこそが、
Fの「活動への向き合い方」の変容であり、キャリア発達そのものであると考えている。

<C「評価の工夫」の視点から>

このような姿を見せたFの「生きる力」を育てる上で、相手に喜んでもらう、楽しんでも
らうために、Fが「何を考え（意識し）たのか」に着目した評価が重要である。Fは、分に

勝てば相手が喜び、またそれを一緒に喜んであげることが年長者らしい、自分にとっても誇らしく望ましい行動であるということに自然に意識したのである。結果ではなく、どのようによい判断・正しい判断ができたかという活動の過程における内面（意識）を肯定的に評価されて初めて、授業における学びが、生活に生きて働く（応用・般化される）意識として根付いていくものである。このような評価を検討することにより、「活動への向き合い方」が「生活への向き合い方」へと発展するものと考えている。

3) 高等部における生活単元学習の検討

① 「学び方別（縦割りグループ）生活単元学習」の検討と実施

学び方別（縦割りグループ）生活単元学習は、単に能力別に類型化することではなく、生活上の生徒の課題、得意とする認知方法などに焦点を当て、生徒が効果的に課題解決に取り組むことを目指して編成、授業計画が作成された。11月に行われる学校祭において作業班で作成した製品の良さを地域の人に知ってもらうことを目標に4つの班が編成された。活動に目的意識をもてるようにする手立てをとして、活動の見通しをもたせること、自分たちの製品の良さを実感すること、活動の中で自分たちが果たす役割の理解などに焦点を当てられていた。十分に力を発揮できる環境設定をしたことで、自己の役割を果たし、自分のめあてや他者との関係を意識しながら意欲的に活動に取り組むことができていた。

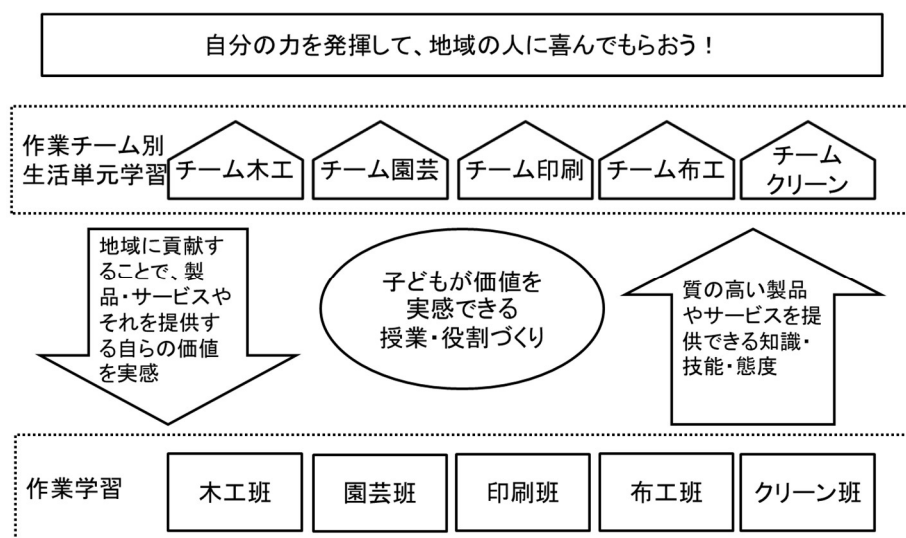


図4 作業チーム別生活単元学習

② 見えてきた課題

T校との検討の中で、見えてきた課題は以下の通りである。高等部生徒の中には、新たな生活単元学習班への所属が理解できていない者もあり、一定の見通しをもって、学習できたものの、教員が意図した目標や課題意識、見通しをもって学び切れたとは言い難かった。高等部の学習集団が学年、作業班、学び方別学習の3集団となり、活動時間の確保や教員による生徒の実態把握が十分にできたとは言えなかった。

③ 作業学習班別生活単元学習の実践

2 学期の授業研究を踏まえて、縦割りの生活単元学習の班を作業班とすることとなった。作業班と同じ構成メンバーであることから、生徒が作業班で身につけた力を仲間との協力・共同により発揮することができ、自らの価値に気づきながら地域に貢献することを目標とできると考えた。

3 学期に「高等部みんなの力で、地域の人に喜んでもらおう」という単元が設定された。具体的な活動として、チーム布工は愛大環境整備室の防寒グッズの製作、チームクリーンは中学部ベランダ及び中学部 3 年教室の清掃が取り上げられた。生徒たちはよく知っている人を想定して、作業を行い、直接手渡す、直接清掃の状況を見てもらうなど、具体的なイメージをもって活動に取り組み、自分たちの活動の意義を確認することができた。この生活単元学習による効果は以下の 2 点である。①身近な人（地域）から褒められることによって、活動の振返りが容易になり、自らの存在価値を見出しやすい。②作業で身につけた力を発揮する場が明確であり、生徒自身が結果だけでなく、過程の評価を実感することができる。

IV. 考察

1. 授業づくりの過程でみてきたこと

表 3 に見られるように、生活単元学習計画案「個別の目標のキーワード」では、小学部高学年以降では明らかに視点が変わっている。また、表 4 及び表 5 に見られるように、授業設計の方針では他者理解に基づいて自己理解を促し、小学部高学年以降は「協力・共同」と「役割の理解」は相互に関連付けられていると言える。このことは、表 8 の単元の概要におけるサブカテゴリーにおいて、「自己理解」「役割の理解と働くことの意義」が小学部高学年以降にのみ記載されていることから確認することができる。年少の学級では人間関係の形成からやりがいを見出し、活動への意欲を高めることが必要であると考えられる。高学年になるにつれ、人間関係の形成や充実の上で自己理解や肯定的な自己評価、人とのかかわり、場や相手に応じた言動が形成される道筋が見えてくると言える。

2. キャリア教育の視点に立った生活単元学習の授業づくり

「計画案」における「授業評価」では、表 9 の「子どもたちの姿」として、「役割の理解と働くことの意義」が重要視され、表 10 の「授業改善」ではどの学級においても活動や課題の設定に言及されていた。各担任は子どもの内面を意識した課題設定を中心に授業改善を試みていると言える。個別の目標、授業づくりの方針をキャリア発達の段階に当てはめ、子どもたちの内面を理解し、実態に即した課題設定を行うことにより、生活単元学習が、キャリア教育が求めている内面の発達を促す授業となるのではないだろうか。

現在、学習指導要領の改訂に向け検討が進められ、「主体的・対話的で深い学び」が重要であるとされている。生活単元学習は、生活に根差した活動を通して、学びを深めていく学習である。各学部の実践事例にあるように、活動的な授業であるかということよりもむしろ、活動を通して、子どもが確かな「生きる力」につながら「内面の働かせ方」を発揮できているかに焦点を当てること、そのための手立てや評価の在り方であるかどうかを検討した授業づくりを進めることが重要である。「授業づくりを通してキャリア発達を支援する」という視

点は、「主体的・対話的で深い学び」を実現する重要なヒントとなり得るものとする。

3. 高等部における生活単元学習の検討

高等部は卒業後の生活に向け、作業学習中心の教育課程となっている。高等部での作業学習は小学部・中学部での生活単元学習、中学部での作業学習でつけた生活に対する意欲を「作業」につなげることで、働く生活をイメージすることが目標となってくる。作業学習では質の高い製品やサービスを目指す、授業の中で作業自体の質を上げることはできても、「働く」ことの意味を理解した上で「働く」意欲を向上させるためには人との関わりを意識して作業が為されることが必要である。何故なら「働く」ということは社会的文脈において成り立つ行為だからである。知的障害がある児童生徒にとって作業を行う行為だけでその文脈を理解することはかなり難しい。自分たちの活動の価値を見出すためには作業に習熟するだけでなく、他者から認められることが必要であり、身近な存在や身近な地域で活動の価値、自分の価値を見出すことは生活単元学習でこそ果たされる。

V. まとめ

本研究では、発達段階、生活年齢等に応じたキャリア発達を促進する生活単元学習の課題を授業づくりの視点から検討することを試みた。学級（学年）を構成する子どもたちの実態が異なるため、単年度の縦断的研究では読み取り切れないこともあるが、作成した生活単元学習計画案による授業設計と授業評価を重ねることで、子どもたちの内面の成長に迫る授業づくりが可能になるであろう。

キャリア教育が目指すのは生涯にわたる社会的自立である。そのためには小学部からの積み上げによる成長の段階があり、自らの仕事の価値、それを行う自分の価値を実感しながら成長していくことが重要である。労働は社会的文脈の中でなされる行為であり、知的障害者、障害の重い人たちにとっては、この社会的文脈をどのように育てるかが課題である。こうした社会的文脈を育て、「働く生活」を実現させるために、小学部での自分の良さ＝価値に気づき、他者意識を育てること、中学部においては身近な地域の中で自分の価値を発揮できる力を育て、さらに他者の価値にも気づけるようにしていくこと、高等部においては自分が行っていることの価値を確認し、働く生活と関連付けるといふ、12年間にわたる指導・支援の系統性が示唆された。

付記

本研究は、愛媛大学教育学部 GP「小学部・中学部 9 年間にわたる系統性のある生活単元学習の在り方についての実践研究ーキャリア発達支援を活かした授業づくりー（研究代表者 榎木暢子）」、同「アクティブラーニングの視点で問い直す生活単元学習の指導に関する実践研究ー小・中・高 12 年間で子どもたちのもつ力を引き出す授業づくりー（研究代表者 榎木暢子）」の助成を受けて実施された。

文献

- 1) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校(2011) 将来の「働く生活」を実現する教育. 明治図書.
- 2) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校(2015) 知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階・内容表(試案)平成27年度版.
- 3) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校(2015) 研究収録40 未来を拓く力の育成.
- 4) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校(2016) 研究収録41 未来を拓く力の育成.
- 5) 藤澤憲(2014) キャリア教育に対する知的障害特別支援学校小・中学部教員の意識調査に関する一考察—子どもに必要な能力と教員の課題意識との関連について—. 日本教育心理学会総会発表論文集, 56, 504.
- 6) 木村宣孝・菊地一文(2011) 特別支援教育におけるキャリア教育の意義と知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス(試案)」作成の経緯. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 38, 3-17.
- 7) 国立特別支援教育総合研究所(2008) 知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究. 平成18・19年度課題別研究報告書.
- 8) 上岡一世(2015) キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり. 明治図書.
- 9) 若林上総(2014) 知的障害児童生徒のキャリア教育で取り上げられる学習内容の調査. 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 13, 63-69.

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)



Aiko KOHARA University of the Ryukyus (Japan)	Mika KATAOKA Kagoshima University (Japan)
Aoko CHINA National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)	Mikio HIRANO Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)
Eonji KIM Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)	Nagako KASHIKI Ehime University (Japan)
Haejin KWON Ritsumeikan University (Japan)	Shogo HIRATA Ibaraki Christian University (Japan)
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University (Japan)	Takahito MASUDA Hirosaki University (Japan)
Iwao KOBAYASHI Tokyo Gakugei University (Japan)	Takashi NAKAMURA University of Teacher Education Fukuoka (Japan)
Kazuhito NOGUCHI Tohoku University (Japan)	Takeshi YASHIMA Joetsu University of Education (Japan)
Keita SUZUKI Kochi University (Japan)	Tomio HOSOBUCHI Saitama University (Japan)
Kenji WATANABE Kio University (Japan)	Toru HOSOKAWA Tohoku University (Japan)
Kohei MORI Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)	Toshihiko KIKUCHI Mie University (Japan)
Liting CHEN Sophia School of Social Welfare (Japan)	Yoshifumi IKEDA Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education

VOL.3 August 2017

© 2017 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.3 August 2017
CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

-
- Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to ADHD.....**Mamiko OTA**, et al. 1
-
- Factors Affect Assessment of Educational Outcome about
Social Function for Children with Intellectual Disabilities.....**Natsuki YANO**, et al. 18
-
- Research on Recognition of Teacher's Expertise in Hearing Impairment Education:
Focus on Expertise such as Curriculum, Teaching Method and Characteristics and Psychology.....**Kohei MORI**, et al. 25
-

REVIEW ARTICLE

-
- Literature Research about the Support of Self-understanding and Career Decision-making
for High-school and University Students with Developmental Disorders..... **Hiroataka KUWAKI**, et al. 38
-

SHORT PAPERS

-
- The Verification of Reliability and Validity of Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT) for Standardization:
Based on the Data from Tochigi Prefecture.....**Haena KIM**, et al. 50
-
- Reasonable Accommodations Required by Physically Handicapped Children Enrolled in Regular Classes:
A Study on Discomfort and Inconvenient Circumstances and Their Corresponding Accommodations
..... **Osamu ISHIDA**. 57
-
- Survey on Information Disclosure Status of Disability Student Support Policy at National Universities:
Mainly on Information on the Homepage..... **Takeshi ODAGIRI**, et al. 65
-

ACTIVITY REPORTS

-
- The Transformation of Thoughts and Feelings of the Siblings of Severely Handicapped Children and the Surrounding People:
Interviews with Siblings during Adolescence..... **Ayaho OCHI**, et al. 77
-
- The Practical Study of the Systematical Life Unit Learning from 1st to 12th Grade of Special Support School:
Class Planning by Utilizing Career Development Support..... **Nagako KASHIKI**, et al. 87
-